

れる須恵器系の土器を焼成した窯跡であるが、この窯跡から出土している壺形土器は、当時、火葬骨を納入する蔵骨器として使用されたものが県内各地から出土している。この不動滝窯跡は、県内に残存する数少ない平安時代の窯跡の一つであり、平安時代の窯業を考える上からも注目されるものである。

注

- ① 藤原忠平等が醍醐天皇の勅を奉じ、弘仁・貞観の二式を集成大成し、延長五年（九二七）十二月二十六日に撰進した式。
- ② 小島鉦作「萩原竜夫著、中世祭祀組織の研究批評と紹介」（昭和三十七年十月三十日発行、『史学雑誌』第七一編第一〇号）
- ③ 『三代実録』
- ④ 同 右
- ⑤ 同 右
- ⑥ 『政事要略』
- ⑦ 『佐賀県の経筒』（昭和四十五年三月二十日、佐賀県教育委員会発行）
- ⑧ 「県内出土の経筒補遺」（昭和四十九年十一月号、『新郷土』）
- ⑨ 松尾禎作「東肥前出土奈良時代乃至平安初期の蔵骨器について」（『佐賀県文化財調査報告書』第三輯、昭和二十九年三月三十一日発行）

中世



高木城跡

概 説

平清盛が武門から出て初めて政権の座につき、続いて源頼朝が鎌倉に幕府を開いて名実共に武家による全国支配の府をつくりあげる。

前代以来発展してきた荘園制は、時代の経過と共に次第に武士による侵略を受けて変質し、崩壊して行く。そのような事象を示しながら武士階級を中核とする政治・社会体制―封建制は、成長の過程をたどって、やがてその確立期である近世に入る。この前後、約四世紀余にわたる期間が、ここで取り扱う時代である。

前代からこの時代の初めの頃にかけて、現在の佐賀市にあたる地域には佐嘉荘・与賀荘など多くの荘園が成立して居り、その他に小津東郷など若干の公領があった。これらの土地の所々には土豪達が次第に武士化しつつ成長し、鎌倉幕府の成立と共に地頭職を与えられて幕府の御家人となっていた。高木氏・龍造寺氏その他の家々である。しかし一般にこの地方の土着勢力は小規模なものが多く、室町時代末期に龍造寺氏の勢力が急速に強大化して、ついには南部の島津、東北部の大友の二氏と共に九州に鼎立する三大勢力となるが、それまでのこの地方の土豪的武家たちは、常に他国もしくは周辺に諸大勢力の影響下に置かれ、それらの諸勢力の消長につれて、あるいは右し、あるいは左せざるを得なかった。

そのような土豪達の一つであった龍造寺氏は、平安末頃、いまの佐賀市城内方面を根拠として歴史の上に姿を現わして来る。その後南北朝時代に一時敵対勢力の為に本貫の地を奪われたことはあったが、間もなくこれを取り返し、以来龍造寺氏はこの地を離れることはなかった。

中世の初め頃、まだどこどころに芦野的な荒地を残している田園の中に、名主であり、小地頭であった龍造寺氏の小規模な屋敷を中心にして、その内外には、いくつかの所従・下人達の住家があり、さらにその周辺には若干の作人農民たちの家が散在している。いまの佐賀市の城内地域はその様な景観を呈していたと思われる。

その後、時代の経過と共に、龍造寺氏の中にもいくつかの庶子家が分立し、それら分立した庶子家の屋敷をめぐってまた集落があちこちに発生する。室町末期に到って龍造寺氏の勢力が飛躍的に増大するまでは、今日の佐賀市の市街地に当るあたりは、大体以上のような状態で推移したであろう。

康家・家兼の時代を経て集落は次第に増大し、隆信の時代に入ると、特にその晩年の頃には、西北九州の覇府にふさわしい城下町佐賀が形成されてきていたであろう。やがて龍造寺氏のおとを受けた鍋島氏が、慶長七、八年から同十四、十五年にかけて大規模な城廓の構築と近世的城下町の経営を行い、今日の佐賀市街の原型が出来上るのである。